婦人と新社會

山田わか主筆

八月號

結婚に對する現代人の態度

結婚か終結でなく結婚が出立點——或る女流文士の結婚觀——便宜結婚の末路——健全な戀愛は同情に脱け變る——猶太婦人の結婚觀——猶太人の家庭——無干涉主義は不可

毎月一回一日發行　第六號　大正九年八月一日發行

東京東洋出版社發行

發明界之驚畏

專賣特許

酸素療器之革命

本器は從來の酸素療器の如く單に酸素を體內に攝取せしむるに止まらずエッキス光線系エレクトロンの透動を起し疾病を直接驅逐し生理組織を直接改善する作用を併有するが故に諸病を癒し其奏効の神速なる到底他の類似品の及ぶ所ではありません。

佐々木式酸素健康器

本器を使用することに依つて病者は癒され健康者は益々健康體となるべく人生幸福の原泉は本器を使用するに依つて初めて得らるべしと稱するも決して過言ではありません速かに御使用あらんことを御勸め致ます。

御申込次第本器說明書及定價表進呈す。

人類之一大福音

製造元・天賜堂・發賣元

東京市淺草區馬道町一ノ一八

婦人と新社會

うるんだやうな空に星が二ッ三ッめばたきをしてゐます。此の頃の雨つゞきにめづらしい星が出たと思ふと同時に、いや星はいつでも出てゐる、唯、雲がじやまして自分達に見せなかつたのだと、すぐに、私は思ひ直しました。それから、又、星と云ふものは自分達人間が苦しんでゐる時でも、喜んでゐる時でも、泣いてゐる時でも、笑つてゐる時でも、いつも同じやうなかつこうをし同じやうな色をして平氣な顏して、自分達を眺め下してゐると思ひました。

そして、昨日の喜びは今日の悲しみ、今日のなげきは明日の幸福と千變萬化する此の人生をあの星のやうに平氣な顏で見ることが出來たなら私達は大變樂であらうと思ひました。けれども、感情の動物と迄定義を下されてゐる私共人間が人生の喜怒哀樂をそうした態度で眺めて見やうとすることは全く不可能であるでせう。併し、私共は少なくとも些々たる感情に動かされて、つのづきあひをしたり、僅かなことに慾ばつて人さ争つたりすることを避ける程度に迄は星のまれが出來るであらうと思ひました。

八月號



結婚に對する現代人の態度

□結婚が終結でなく結婚が出立點

何事に限らず始めるには容易でありますが、併し、それを持續しやうとする時に其處に大抵困難が伴ひます。今日の若い人で外國語に手をつけてゐない人は先づ無いでせう。けれども、さて、どれだけの人が其の外國語を活用してゐるかと云ふとそれは本當に僅かなものであらうと思ひます。私共が米國から歸へる時には歸朝する同胞

が三百人程同船致しました。けれども、其のうちで英書を手にしてゐる人は殆んど一人もありませんでした。皆日本から送られた『太陽』『實業の日本』『婦人世界』と云ふやうな雜誌や、講談ものや、蘆花さんの小說と云ふやうなもの計りでした。で、其の理由を觀察して見ました處が、實は、誰もかれもが英書を樂しむ程、又は、活用する程英語が出來てゐないのでした。

英語國に住んでゐて英語の必要は毎日々々彼等をヒシ〳〵とせめつけてゐたに相違ないのですが、そして、少なくとも五六年、多くは十有餘年、さうした生活をして來た人達なのですが、それでゐてそうなのですから、日本に居る一般の人達が外國語の書物を利用出來ないのは、むしろ、當然であるかも知れません。『外國語をやつて見よう』『外國語を一ッ利用してやらう』こう思ふのは百人が百人皆同じです。そして、語學研究はぞうさなく始まります。けれども、ぞうさなく始めた其の研究を倦まずたゆまず續けることはじようだん事ではありません。そして、百人のうちの九十九人迄は

其の困難に負けてしまうのです。

戀愛が又さうです。一人の男と一人の女の間に戀愛が成立するのは比較的に容易です。けれども、一生涯を貫いて其の戀愛を生かして行かうとする時に、それも又じよいうだんい事ではありません。其處に必ずいろ〳〵な困難が出て來ます。けれども、一生涯の大方針を定めると同時に、毎日々々の小さなことにもお互ひにゆづり合ひ、お互ひに責任を重んじ、結婚生活を全ふして共白髪の末迄も添い遂げて、始めて偉大な戀愛、有益な結婚であつたのです。

けれども、今日迄の戀愛物語は、大抵、結婚が其の終結でありました。物語と云ふものが、唯、一時のなぐさみに過ぎないものであるならば其れでも一つの役をしてゐるものでありますが、併し、迷い易い一般人の生活の標準を敎へようとする時には、物語は結婚から始まるべきものだと私は思ひます。見染めるとか、求愛とか、新婚旅行とか云ふやうなことは戀愛のほんの序幕で本當の芝居はそれから後に始まるので

すゝ序幕に計り重きを置いて、本當に力を入れなければならない結婚生活其のものを輕視してゐる結果が數限りのない結婚哀話となり、結婚の悲劇となるのです。

□或る女流文士の戀愛觀

或る女流小說家の感想文のうちに次のやうなのがありました。夏の一夜彼女はもう眠りに付いた幼兒を下女に任ねて、夫と二人で散步に出かけたのです。二人は銀座邊迄出かけて行つて、そして、カフエーへよつたり、まぶしいやうな美しい陳列窓をのぞいたり、橋のたもとのうす暗い處へ來ると夫がふざけて、ちよいと物かげに姿をかくしたりするのを彼女が見つけ出して夫の背中を叩いたり、まるで結婚前の戀中であつた時のやうに樂しい、いゝ氣持ちになつたのだそうです。そして、其のいゝ氣持ちは電車に乘つた後迄も、又、電車から下りて淋しい郊外の暗い道を步む時迄も續いて、二人は手を引き合つてゐたのだそうです。處がうちの前迄來ると家の中では子供

が目をさましたと見へてワー〳〵云つて泣いてゐたそうです。で、其の聲を聞くと同時に彼女は今迄の樂しい氣分がすつかり消へてしまつて『ああ、自分達の樂しい時代はもう過ぎ去つたのだ。自分達の甘い戀はもう過去のものだ。自分達の今の生活はじめだ。これが現實なのだ。』とつく〴〵思つたと云ふのです。

私はそれを讀んだ時にプッとふき出したいやうな氣持ちになりました。同時に幾分の憤りを感じました。もし、それが男子の感想文であるならば、『男の無責任な享樂主義が又、始まつた』位に感じて自分の心を通過させてしまうことが出來たでせうが、それが婦人であるだけに私の心にひッかゝつて幾分の憤りさへ感じたのでありました。徹頭徹尾利己的な俗悪なこう云ふ種類の個人主義的の戀愛觀が現代人の最大なる缺點であることを私は信じてゐるものでありますから。其のために男も女も不幸である計りでなく、子供の迷惑は甚大なものでありますから。

□便宜結婚の末路

今より五六年も前のことですが地方から出て來た或る若い婦人が私方に三四ヶ月滯在してゐたことがありました。彼女は可なり高い位置を占めてゐる役人の妻であつたのですが、或る青年にラブを感じたゝめに其の役人の妻となつてゐることが苦痛で堪えられなくなつて、一切を捨てゝ上京したと云ふのでした。彼女の話によると、彼女はまだ何にも知らぬ十六七の時に彼女の親が何にかの策略上彼女に強いた結婚であるために、從つて夫に對して愛情を感じたことはなかつた。だから、今度のラブは正當だといふのでありました。話を聞いたゞけでは本當に同情に價ひするものでありました。そして、無意義な結婚生活、寄生の生活には堪えられなくなつて上京したのであるから女中代りに使つて呉れ。精神上の苦痛にくらべては臺所の仕事やすゝぎ洗濯位何でもない。神聖な愛のためどんなことでも忍ぶ覺悟だ、と云ふのでありました。

一應最もな言葉に私達も同意して臺所を働いて貰ふことにしました。處が、彼女が思ひをよせてゐる靑年からは決して便りがありませんでした。毎日のやうに彼女が手紙を飛ばせるのでしたが決して返事が來ませんでした。幾人かの女中を使つて何一ツ不自由のない奥樣の身で居られるものを其の男のために下女のやうなまね迄してゐるのだと云ふやうなこと迄も書き送つたやうでしたが、それでも其の男は一言のなぐさめの言葉さへ彼女に書き送りませんでした。ツイに彼女は全く絶望のどん底へ落ちてしまつて何にも手につかないやうになりました。目はつり上がつてしまつて、そでないことを口ばしるやうに迄なつてしまいました。それには私共も全く當惑してしまつたのです。

或る日彼女はこうして一所にゐてもお互ひに窮屈だから、自分は弟でも呼びよせて小さな家を持つて見ると云ひ出しました。そして、彼女は私の家を出て行きました。それは或る年の三月でありました、處が、彼女は私方を出るなり何日たつても何の便

りも呉れません。』家を持つとは云つたが、家を持つた樣子もなし、どうしたのだらう。あんな變な目付きをしてゐたから自殺しはしないだらうか』と云ふやうなことを云つて明け暮れ私共は氣遣つてゐました。

それから、何ケ月か過ぎた或る朝一本の手紙が參りました。見ると其の婦人と名は同じでしたが姓が異つてゐました。『はてな』と云ひながら開いて見ると、それは矢張り彼女からで、しかも私方を出た翌々月の五月、目もつり上がる程戀してゐた青年ではなく、外の男と結婚した知らせなのでした。あまりの意外さに私共は唯呆氣にとられてゐる計りでした。

後から聞く處によると彼女は私のうちを出るなり直ぐ或る文士の許を尋ねました。と云ふのは其の文士が彼女の戀する青年と知り合ひであるので其の文士の手を經て其の青年から手紙を取らうとしたのでした。けれども、其の文士と夫婦になつてしまつたのです。それから、二年たち、四年すぎても其の夫婦は無事にむつまじく——最も

逢つたことがないのですから實際はどうであつたか分りませんが——暮して居るやうでありますから、實に不思議なものだと私は常に思つてゐました。死ぬ程戀しい男が外にあつて、そして、其の文士もそれをよく知つてゐて、どうして夫婦になつて居られるものかと云ふのが私の疑問であつたのです。

處が、此の頃新聞紙は其の夫婦が離縁になつたことを報じてゐます。『成程ね』と私は始めて合點が行つたのです。便宜上一時一所にゐたのだと云ふことが分つたのです。二人の間に戀愛が成立したのでもなければ、又、本當の意味の夫婦でもなかつたのです。自分自身に忠實でないものが夫に對し、又は、妻に對して忠實であるわけがありません。忠實がないのに立派な夫婦の實が擧がつて行くわけがありません。

□完全な戀愛は同情に脫け變る

生涯を貫いて健全に成長して行く立派な夫婦の愛は清い美しい戀愛が中途で同情に

脱け變つたものであります。清い美しい戀愛の持主は既に清淨な着實な心の持主でありますから日々の生活の極く小さな事柄にも責任の觀念が强いに相違ありません。そして、眞面目に苦勞を共にし、苦痛を分擔してゐるうちにいつの間にか戀愛は同情と化し、夫婦の間はますます／＼かたく結ばれて行くのです。前述の女流小說家のやうに、又、大多數の男のやうに、いつも花にたわむれる蝶のやうな戀を求めてゐる人は、一生迷つて戀を漁り步く浮氣ものです。ジヤラツキたいために相手を求めるのであるから、妻の容色がおとろへるならば外に若い女を求め、夫が生活につかれて、じゞむさくなれば外に若い男を求めるやうになるのです。

又、一時の孤獨を忘れるため、或ひは食べさせて貰ふために夫婦になつて性格の適合も理想の合致も、獻身の精神も、義務の觀念も、調和の見込みもないのに同棲するのであるならば結果が不幸に終るのはあまりに當然です。結婚は自己の完成であると同時に、種族への奉仕、社會への義務であると云ふことを忘れて、唯、自己滿足の具

としやうとする時に其處にさまぐな不便不幸が生じて遂には悲劇に終るのです。

語學をものにするには、少なくても、一日のゆるみもない十年の月日が必要でありますやうに、一組の夫婦が立派に成立するには、つまり、戀愛が同情に脫け變はるには矢張り其の位の年月の絕へざる自己犧牲の精神、並びに社會奉仕の觀念が必要です。そして、其れには確固とした理想と、勤勉な修養が必要です。

宗敎的な嚴粛な意義を結婚生活のうちに認めることによつて其の中から私共の結婚生活の幸福は生れて來ます。けれども、義務や奉仕の精神を切り離した結婚生活を求めることによつて、そう云ふものは此の世の中に存在しないのですから、いろくの間違ひ、悲慘な結果が生じ、社會の風儀が亂れるのです。

□猶太婦人の結婚觀

現代の新人と云はれる人の結婚觀は個人の權利、そして、自己の利益が中心であり

ます。けれども、從來の結婚は種族への奉仕、社會への義務でありました。我が國の從來の此の結婚觀は猶太人の結婚觀によく似てゐます。猶太人の道德は個人的でなく集合的でありますから、猶太人の結婚は個人の完成でも、個人の滿足のためでも、快樂のためでもなく、神への奉仕、神の子なる種族の繼續が目的であります。子供を生み養育すると云ふことが人生に於ける最大事であります。子供のための結婚と家庭生活が凡ての男女の義務であつて、そして、それが根深く宗敎的になつて居ります。ですから、猶太人の母は家庭外の仕事、則ち、家を外にしての仕事にたづさわることを嫌ひます。彼女達は非常に舊式でありますが、併し、彼女達は無限に幸福であります。

猶太婦人の理想は決して自個の表現ではなく、夫に、子供に、種族に、神に同化することであります。彼女達は自己の生活を習慣に從へることを無上の價値と心得てゐます。內部生活の價値を充分に自覺してゐる婦人が矢張りそうです。基督敎の結婚觀は人間の弱點がしからしむるので止むを得ないことだとしてゐるに反して、猶太敎の

結婚は神の命令であります。基督敎とは正反對に結婚しないことが神に對して罪であるのです。猶太人にとつては禁慾主義が罪惡であると同時に、戀愛が人生の全部であるかのやうに觀ずるローマンテックな見方も等しく罪惡であるのです。

猶太婦人は徹頭徹尾個人主義者でありません。そして、一切が其處から出發してゐます。結婚のうちに決して自己滿足を求めやうとはせず、自分自身の喜びのために心を全部ひかれると云ふこともなく、自分自身の悲しみのために自分を浸すと云ふやうなこともなく、彼女達は絕對に夫を信じ子を信じてゐます。そして、夫や子供が彼女達を失望させた時には彼女達は彼女達の種族を信じ、神を信じてゐます。これが猶太婦人の生活の重心となつてゐるのです。數千年の間猶太婦人は奉仕の價値を敎へられ理想への獻身的精神を養はれて來ました。そして、神の意志に從つて結婚したと云ふ觀念が彼女達の結婚を確實にしてゐます。そして、其處から完全な幸福を得てゐます。

たとへ、無學であつても彼女達は一ッの眞理を握つてゐます。つまり、我々は自己を無にすることによつて幸福であり、我々の生命が不朽であると云ふ眞理を彼女達は握つてゐるのです。猶太人の精神は、書物から學ぶのでなく實際生活の上から彼女達はそれを悟つてゐるのです。猶太人の精神は、夫に子供に及び家庭に獻身的であることを婦人に要求し、理想に及び妻に獻身的であることを男子に要求してゐます。そして、男女各々が獻身的であることによつて男女は平等な榮光、平等な喜び、平等な名譽を贏ち得ることを信じてゐるのです。家庭の神聖と云ふことが何代も〳〵の間猶太種族をつないで來た美しい金鎖であるのです。家庭の神聖を汚すものに對しては猶太人は常に勇敢に戰つて來ました。

□猶太人の家庭

ですから、猶太人の家庭は常に平和で、そして、美しいのです。婦人のなさねばな

らぬ仕事は習慣によつて規定され、神の命令と云ふことによつて、神聖にされてゐますから。一家の主人は毎週金曜日の晩に自分の妻である主婦の德を賞揚するためにて舊約書のうちの箴言の一節をとつて家族を皆集めて讀み上げます。そして、それは『德の高い婦人は家事を專心注意する。彼女の用ゆる衣類は丈夫である。彼女のよそをいは凜々しくある。彼女は常に未來に希望をもつてゐる。』と云ふのであります。其の外猶太人の夫が妻に拂はなければならない義務はいろ〳〵あつて、それは細々と規定されてあります。其の規定に從つて彼は彼女のために働き、彼女を崇め、彼女を扶助するために彼女に結へつけられてゐるのであります。猶太人の生活の基調となつてゐる書物の中に次のやうなのがあります。

『富者とは誰か？』

『動作の優美な婦人を妻とした人である。』

『幸福な人とは誰か？』

『温和な謙讓な妻を持つた人である』
そして、又、
『男子の幸福は徹頭徹尾妻によつて創造されるものである。』
と云ひ、又、
『純潔な愛情のみなぎつてゐる家庭に神が住む。』
と云ひ、それから、又
『汝の妻に冷酷で無禮であつてはならぬ。己れの行動が妻を苦しめることになりはせずやと夫は常に注意してゐなければならぬ。なぜならば妻に涙が多い時には、妻の上に置かれた其の苦しみは神の近くに行くものであるから。』
と男子に命じ、男子を戒めてあります。そして、これに類した句は猶太人の書物のうちには數限りもなくあると云ふことです。こう云ふ風に猶太婦人が夫に崇められるには彼女が既にそれだけのことを實行してゐるからであります。猶太人の父は彼の家族

の宗教上の教師でありますから、其の義務が必然彼を家庭的にします。妻への獻身が男子の本務であると云ふのが國民性になつてゐるので、猶太の法律が制定される時に或る人が

『もし、夫が妻に對して不親切であつた場合には』

と質問した時に立法者は

『夫が妻に不親切であると云ふやうなことは此のイスラエルのうちにはあり得べきことではない。』

と答へたそうであります。こう云ふ態度の民族が母性を尊重することは云はずもがなであります。

『凡ての道德の教師』

と云つて、彼等は母性を崇めてゐます。

固定した信仰、何千年の間使い古した習慣の下に行はれる結婚、及び、家庭生活が

幸福であるのに、進んだ智力の所有者、自覺したと云はれる現代人の結婚及び家庭生活に不幸が多いのは何故でせう。進んだ智力を所有する我々現代婦人が全然舊婦人のやうな、又は、猶太婦人のやうな態度になつて自己を沒却することは不可能でありませう。けれども・少なくとも舊婦人の持つてゐたものから我々は學ばねばならぬ處がありません。

現代婦人のなやみの多くは思想の混亂から來てゐるのであらうと思つてゐます。舊婦人の理想、舊婦人の生活の標準を捨てるには捨てたが、さて、それに代る一定の理想と、夫として妻としてとるべき行動の標準もないのが、凡ての混雜、凡ての不幸の源であらうと思ひます。現代婦人の誤まつた平等觀があらゆる禍を生んでゐるのであらうと私は思ひます。現代婦人の生活の標準はいろいろあります。結婚後も職業に從事しやうと思へば出來ます。それに付いて非難する人はありません。又、夫の收入を當てに家事を專心見やうとすればそれも結構なことだとして承認されます。けれども、

此の自由が則ち、生活に無經驗な若い者に一定の標準を指示しないことが却つて若い者の精力を浪費することになりはしないかを私は恐れます。經驗のないことは知る由がない。知らないから無駄をするのは當然なことでありませう。

□無干涉主義は不可

無干涉主義は產業にも經濟にも嘘議論であるやうに結婚にも矢張り嘘議論であると云ふことを私は考へます。靑年男女のなま半可な自覺と云ふことが却つて多くの害を釀すものであることを私は考へます。彼等に一定の確固とした標準のないことが彼等を五里霧中に迷はさしむるものであることを私は考へます。

現代の經濟上の變化が現代の禍を釀したと人は云ひます。けれども、現代の禍は經濟が根本的理由であるとは私は思ひません。人生觀や結婚觀が誤まつてゐる事、及び、奉仕、自由、幸福、或ひは義務の見方が誤まつてゐることは經濟狀態から來てゐるの

ではないでせう。最も現代が非常に經濟的に傾いてひッつかみ主義的である事は事實ですが。猶太婦人のやうに、且つ又、我が國の從來の婦人のやうに、過去の習慣に全然從ふことが出來なくなつた現代婦人のために確固とした標準、新しい型を、今、即座に造ることの不可能は私も認めてゐます。けれども、とにかく、これだけのことは云へると思ひます。

現代の多くの男女のやうに個人的愛、則ち、利己的慾望を主眼として愛を求め、そして、それを永久の幸福の根源にしやうとしても、それは結局不幸に終ること。若い人達は確固とした理想を造らねばならぬこと。若いうちは出來心に支配されるものであるから其れを警戒せねばならぬこと。個人の自由と云ふこと其れだけで決して幸福は得られないこと。婦人の女らしさは無限に貴いものであること。など。

いづれにしろ、現代は若い婦人にとつては非常に危險の多い時であります。此の時に當つて最も大切なものは理想を造ることであります。確固とした理想が出來るなら

ば若い人達も一時の感情に動かされるやうなことはなく、利己的な結婚や、便宜上の結婚などをしないやうになり、結婚のうちに深い意義を見出すやうになりませう。猶太婦人が男子からも種族からも無限な尊敬を受けて、そして、彼女達自身も幸福であるのは彼女達の理想が義務の上にあつて、そして、彼女達の結婚觀が宗敎的であることに原因してゐることを私達は考へなければなりません。

猶太人の家庭は實に理想的なものであるにも拘らず、猶太人種は社會から非常な迫害を受けてゐたゝめに社會を敵視するやうになつて、其の善良な家庭の影響が社會に及ぼさなかつたのは遺憾なことでありますが、とにかく、彼等自身同族のうちには滿足があつたのです。

過度時代に遭遇した現代人は社會的に種族的に殊に責任が重いものであることを私達は今自覺しなければなりません。なぜなれば下手にまごつくと現代は先人が何百年何千年かゝつて築き上げて來た有形無形の富を無に歸してしまうことになります。も

し、そうしたなら私達は次代に對する反逆人であります。私共の子供は私共夫婦のものではなく、全體としての人類のもの、小さく云へば國家のもの、そして、先人達が殘して行つた富を受け繼ぐものであることを私達は悟らなければなりません。

其處で、私共は戀愛の自由を主張すると同時に戀愛の種族に對する義務、自由に生れた戀愛は必ず立派に成長させ、それが夫婦の同情と脫け變る迄完成を期す覺悟がなければなりません。夫に對する獻身、勿論、夫の幸不幸が一ッにかゝつて自分にあると云ふことを理解して、それから家庭に對し子供に對し――まだ生れぬ子供に對して迄も――獻身的精神を養はなければなりません。

現代に於て、ます〳〵其の流行を大くして行く俗惡な自己中心主義、子供をじやまにして、戀愛と結婚を自己滿足の具に供しようとする風潮は、自己を害し、種族を害し、國を亡すものであることを私は憂へます。新時代の婦人は何は措いても先づ戀愛と結婚の社會的意義を悟らなければなりません。

ナイテンゲール嬢

一八二〇
一九二〇

今年はフローレンス●ナイテンゲール嬢の百年祭であります。『燭臺を持つた婦人』"Lady with the Lamp"と云ふのは世界で有名な言葉になつて居りますが、これは、クリミヤの野戰病院で院内の凡てが寢しづまつた後にナイテンゲールが燭臺を手にして足音を忍ばせて重い病傷兵を見舞つて歩いた其の神のやうな姿をさして云つたものであります。

畫工はキャンバスを、彫刻家は冷いマーブルを取り扱ふのであるが、看護婦と云ふ藝術家は生きてゐる神の聖靈がやどる人間の體を取り扱ふのである。畫工が、又は彫刻家が其の技術をみがくために全力を傾倒するやうに、否、それ以上に我々大美術

家である看護婦は看護術のために我々の全力を注ぎ、其の準備をしなければならぬ。と云ふ信念の下にナイチンゲールは自己の修養につとめました。何と云ふ貴い大精神でありませう。

されば、我が國を始め、世界至る處で今年の五月十二日には看護婦達が彼女の百年祭を祝しました。彼女の絶大なる力は從來の病院の建設法、及び、經營法に大革命を起し、彼女の造つた標準は、今、至る處で行はれてゐます。倫敦に於けるセー●トーマス病院は彼女の創立にかゝる最初の看護婦養成所でありますし、又、『ナイチンゲール看護婦會』は彼女の精神と練習法を世界至る處に傳播して行つたのであります。

一體、ナイチンゲール孃が生れた時分にも英國の上中流階級の婦人の天地は、唯、客間と教會でありましたので、其の當時婦人が公共のために働くなどゝ云ふことはまるで慧星が現れたやうなものであつたのです。實に、彼女は因習の中から飛び出した一種の新婦人であつたのです。永い彼女の一生を貫いて絕へず鳴りひゞいてゐた或る

力は幼年時代の彼女にも既に現れてゐました。彼女は神學と因習につゝまれてゐたのでありますが、彼女の頭腦は全く科學的でありました。ですから、彼女の云ふことは神學の言葉で科學的のものを包んでありました。ですから、彼女の書いたものゝうちには神と云ふ言葉が度々現れて來ますけれども、天國と云ふことはありません。彼女は自分の住所を天國に求めてはゐなかつたのです。彼女は實際の世界に住んで實際の仕事をしようとしてゐたのです。云ひかへれば、彼女は空想家ではなく、實際家であつたのです。

ヴイクトリヤ女王の治世に上流の家庭に生れたナイテンゲールは普通ならばヴクトリアン貴婦人となつて當然客間で一生を送るべき人であつたのです。けれどもその運命を自覺した時に彼女は非常に苦しみました。そして、その苦しみの結晶が彼女の決心となり、あの偉大な仕事となつたのです。彼女が實際社會に出て活動しよう〳〵として、そして、やうやく彼女の望みが叶つたのはもう彼女が三十を越してゐる時で

した。彼女は當時の一切の困習を破つてとう〳〵成功をし、そして、至る處に追從者を得たのでありますが、恐らく、今日の社會事業のうちで公衆衞生看護程文明に密着な關係があるものはないでせう。則ち、其の仕事のうちには、我が國でこそ、まだ發達してゐませんが、訪門看護、學校看護、產業看護、精神看護、それから、病院の社會奉仕が數へられます。そして、社會看護が小兒の死亡率を非常に減じたことは世間周知の事實であります。

ナイテンゲールは早くから巡回看護に興味を持つてゐてリバプールのために巡回看婦會を造りました。そして、一八八一年には『貧民のための科學的看護法』を出版致しましたが、この著作のうちに看護の根本的重用さが強く論じてあります。それから、『看護法の要目』と云ふ本は今より十年計り前、赤十字社副院長故岩井禎三氏のために私が反譯致しましたが、これが今猶看護法の敎科書であります。

彼女が三十一歲の時に友人に送つた手紙の中に次のやうなのがあります。『私は敎會を建てるとか、こはすとか、又は監督をどうするとか云ふやうなことにはどうしても

熱心になれない。信仰と云ふものは教會が造るのではなく、自然に人の心に沸いて來るものである。故に、英國教會も、キャソリック教會も我々の信仰とは無關係なものである。けれども、人はソクラテスの時代と同じやうに今でも、人間の心には一定の法則があることを知らない。ソクラテス以來、人は物理學の法則を學んだ。そして、心理學の法則を學ばない。否、その存在すらも認めない。人は神の惠みとか、神の感化とか云ふことを云ふ。けれども、もし、其の惠みとか感化とか云ふことが神の任意の賜物であるならば神はなぜ、もつと、早くそれを我々に與へなかつたか？　或ひは又、もし、或る法則によつて其れが來るものならば、なぜ人はもつと早くそれを發見しなかつたか？　要するに、私はもつと正確に、神が我々人間を取り扱つた方法を研究して貰いたいと思ふ。そうすれば、恐らく、神の仕事がどう云ふものであるかを判斷することが出來ると思ふ。』

こう云ふ風に彼女には哲學上の疑問がありました。けれども、それは彼女の仕事の上には干渉はしませんでした。こう云ふ態度であつたナイテンゲールが、もし、この

方面に關する著作をしたならば、確に其れは現代の心理解剖學に與へる處があり、又統計學も益する處が甚太であつたらうと云はれてゐます。

とにかく、彼女はクリミヤ戰爭中の實驗を基礎として、其の戰爭が人々の心の中に唯一ツの記憶に過ぎないものとなつた迄、則ち、四十年の間、政治家の頭の上には大痛棒を與へ、役人主義の無駄と收賄、及び、衞生學の保護者であると想像されてゐた專門家の無學の上に、絕へざる戰爭を續けて來ました。又、私共女性に實際の世界を掴ませようと努力して居られたことも私共は今見ることが出來ます。

今年の五月十二日に世界至る處でナイテンゲールの百年祭が祝されたことは前にも申ましたが、其のうちで最も興味ある祝賀の仕方は、看護婦協會中央本部で、ナイテンゲールの一生の仕事のうちの或る出來事を題材とした劇を一千圓の償金で募集したことであります。天使のやうに上品で美しい『燭臺を持つた婦人』"Lady with the Lamp"を中心に仕組まれた劇が定めし現れて來るであらうと思つて私は多大な興味をもつて待つて居ります。

婦人の經濟的地位と賣笑



勞働婦人の賃銀がなぜ低廉であるかと云ふことが考へられる場合に、いつも引證されるのは、女は自分の勞働に對する報酬以外に他に收入の道があるからだと云ふことである。そして、それだから婦人の經濟上の位置を論ずる時には、女が自分の肉體を鬻いで得る收益をも其の計算に入れなければならぬのだ、と云はれる。これは一見非常に酷論のやうではあるが、併し、それは實際事實の觀察で決して一片の感情論ではない。今日大學を卒業した婦人が一年間に五百磅の收入を得ることは甚だ困難であるが、併し、世間には全くの無學でも容色が美しくて、少し氣轉がきいて居つて、そして、廻り合せがよければ何萬と云ふ金を一時にでも手に入れることの出來る婦人がある。墺國のエミール•ライヒの著『時代を通じての婦人』の中に『男が最高の稱號と最大の富とを賭けて迄望んでゐるものは女の

容色である。故に、どんなに貧乏で裏長屋に住んで内職をしてゐる娘でも、自分さへ其の氣になれば二三週間分の賃金位は一夜で儲け得ることを知つてゐる。』と皮肉なことが書いてある。それは事實で決して議論ではない。もし、我々がこう云ふ事柄に面を向けるのが嫌ならば婦人問題などに於ては沈默してゐた方が好い。

　現代は總ての問題に對して精密な思考と根本的研究を要する時代である。殊に今日の賣娼問題は好加減な常識論だけでは何の効力もない。然るにこれ迄賣娼の事に關しては一向世間は平氣でゐた。たゞ、女の肉體の賣手と買手と、警察と醫者と眞護婦と、それから、少數の慈善家が關係するだけで、世間は其れには全く沒交渉でゐた。

　我々はこの問題を取扱ふに當り全然感情的議論を排さなければならない。感情の伴はない人間の行爲と云ふものは無いけれども、實行の伴はない感情を排さなければならぬのである。婦人は自分達の姉妹や子供や夫の上に直接影響する事柄には熱狂しがちのものであるが、併し、これ迄婦人は賣娼問題などに關係するのは宜しくないとされてゐた。そして、それは婦人の感情があまり鋭敏であるからだと云はれてゐた。けれども、此の問題を起した抑々の根源は男子の情慾である。故に、男子が此の問題に關する法律や規定を造る場合に、男子は果して自分

等の情を離れ、神の如く公平に其の法律と規定を造り得るであらうか。我々は不幸にしてそう信ずることの出來ない多くの理由を持つてゐる。故に、婦人がこの問題に着手しなければならぬのである。婦人は其の天性の銳敏な情性を益々鋭敏に働かせてこの問題の解決に着手しなければならぬのである。併し、忘れてならぬことは事實を研究するに際して、男女間の行爲や其の結果に對して、感情を以て判斷してはならない、我々の批判の態度の第一條件は常に事實を知識に訴へると云ふことでなければならぬ。

男子は常に婦人を善良な女と悪しき女との二ッに區別してゐる。そして、所謂善良な女と稱する型の婦人は何事にも上品ぶつた而も頗る單調な女である。これに反して所謂悪い女と云ふのは下賤ではあるけれども、併し、愉快な魅力を持つた女である。そして、善良な女は何時も輿の上に祭り上げられ制限された生活に滿足し、感情は兎角鈍つてゐる。處で、悪い女は或る區廓内に押し込められ、特別扱ひにされてゐる。そして、それは善良な婦人の範圍に害毒を撒き散らさぬやうにするために或る空想家が考へ出した方法なのである。併し、さう云ふ空想家に限つて、女は恰も天使でゞもあるかのやうに考へて、如何なる誘惑も女を墮落に陥れることは出來ないかのやうに云ふ。

我々は生きた人間の靈魂を尊敬するに

躊躇しない。我々は罪惡の淵に陷つた人間が善道に立返るといふ奇蹟的信仰も決して惡くはないと考へる。而して、誰も罪惡の女に石を投げる權利を持たないものであることも信じる。それは畢竟石を投げることも惡口することも決してその女の害惡を改革させることにはならないことを知つてゐるからである。併し、我々が正直に告白すれば、自己に對して何等の反省もなく、自己の肉體を自重することも知らない婦人の數が決して少なくないことを我々は認めてゐる。貪慾なる女、冷酷なる女、情操を純化することを知らない女、肉塊のやうな女、怠惰なる女、虛飾な女、卑屈な女、などの數が決して少なくないことを我々は抗むわけには行かない。そして、もし、かやうな女さへも尊敬せねばならぬものだとすれば、同時に、かやうな女の相手になる男も尊敬せねばならぬことになる。そして、賣娼の生活はそれ等の罪惡を奬勵するものであり、そして、それが正當なる人生を無視する第一の原因である。

こゝに於て、我々は先づ、問題を三ツに分けて研究して行く必要がある。

一、賣娼とは何ぞや

一般に公認せらるゝやうな賣娼の定義を下すことは容易でない。が、私の考へる處によれば物質上の利益のために、自己を欺いて目前の報酬を得やうとする行爲が賣娼である。たとへば、もし、虛妄

を揑造して中傷的記事を書いて金を貰つた者があるとすれば、其の人は自分のペンを汚瀆したものである。併し、眞實だと信じて行つたことに對して金を貰つても、それは決して汚瀆でない。これと同じやうに女が金を貰つて愛もない男子に自己を與へる事は賣淫である。けれども愛してゐる男から金を貰つてもそれは賣淫ではない。であるから、結婚の中にも賣淫の事實が少なからずあると云ふことも認めなければならぬ。のみならず、結婚となると物質上の利益に加ふるに社會上の位地と云ふことも包含されて來る。たとへば、外面は利益でないとしても結婚の動機が金錢上にあることは屢々ある。そして、こう云ふ結婚の結果が男女双方の上に惡いことは云ふ迄もない。けれども、人は自分の娘に貧乏生活はさせたくないと云ふ人情から、商賣的の結婚をさせたがるのである。これを矯正する手段は男女に神聖なる戀愛の意義を敎へ、肉慾の賣買の嫌惡すべきものであると云ふ事の健全な社會的輿論を造ることである。かくの如き輿論が盛になれば買はうとする男も賣らうとする女も、共に自己の良心に對して羞恥を感ずるに至るであらう。これが愛なき結婚を處置する唯一の方法である。

普通一般に賣娼と稱するものは結婚以外の關係を意味するので、結局は亂婚の狀態である。賣娼は多くの場合多數の男子がまだ妻帶せざるがため、或ひは一人

の妻に滿足の出來ないと云ふ事實から起つて來る問題である。私はかゝる境遇に墮落する女の如何に多いかを認める。實際上それが調査は非常に困難であるが、概して其の數は男が賣娼婦に往來する比例に準するものであると云ふことは確である。

賣娼が賣笑婦自身の身體に及ぼす害毒は今更云ふ迄もない事で、中には例外はあつても、これがために早死する女が決して少なくない。男子の健康に對する害毒も決して看過することは出來ない。どんなに醫者の手當を求めても以前の體に歸へる事は難しい。殊に有妻の男子が娼婦に接したゝめに其の妻に傳播する害毒は實に恐るべきものである。男子の不品行の結果から、子供に遺傳する害毒、及び、妻が生理上、精神上受くる大なる苦惱は莫大なるものである。其の上に賣娼は種々なる誘惑的事實の下に婦人の勞働者にも常に大なる影響を與へてゐる。道德上の害惡に關してこれを論ずれば大著をなす迄の澤山な材料がある。

二、賣娼は必要なりや

或る人は、賣娼は必要上止むを得ない害惡だと云つてゐる。そして、其れを二ッの意味に用ひてゐる(一)人間の健康上必要であると云ふ事と(二)男女の罪惡性の暴露から來る害惡だと云ふ說明である。併し、男子の健康のために婦人を物品視し、病氣となし、早世せしめ、又は

病的な子供を生ましめて迄、男子の健康を保たねばならぬと云ふ理由を、我々は見出すことが出來ない。賣娼はそれ自身が既に男女を墮落せしむるものであるからそれが必要であると云ふことには如何としても同意できぬ。一歩を讓つて賣娼の必要と云ふことが、人間の健康には性交が必要であると云ふ意味だとすれば、結婚に於て、其の性交の要求が滿足されない場合には、これを結婚外に求むるやうになるのは自然の成り行きである。そして、もし、それを正當だとするならば、一人の妻で滿足しない男の要求に應ずる賣娼は一ッの立派な役目を果して居るのであるから、彼女達を卑しむ理由は少しもないことになる。

英國には年齡二十歲以上の男子で尙未婚の生活を送つてゐるものが三百萬人ある。そして、其の人々の大部分が性交の實行者でないと云ふことである。そしてこれは經濟事情、及び、結婚制度の結果だと云ふことである故に、今日の社會狀態が變つて結婚制度が改まるならば今日の未婚の女子が男子の戀愛の對象となつて、そして、結婚生活を實現することは必ずしも困難ではないであらう。社會狀態の不完全なために結婚出來ない三百萬人の女子の處女性を保證するために二十五六萬の同性の犧牲者を置かねばならぬと云ふことは何とも我慢なり難きことである。

今日の男女は眞面目に結婚制度に如何

なる缺陷が存在するかを考究すべきである。併し、賣娼の存在に對して決して必要と云ふ言葉を用いてはならぬ。もと人間の性質から出た必然な結果だと云へば幾分其の意味はあるけれども、併し我々は更に其れに人間の罪悪性と社會の悪制度と云ふことを附加しなければならない。かくすることによつて現代の事實に對する全體の眞相を捉へ得るであらう。で、もし、人間の性質、及び、社會の制度が其の缺陥の源であるとすれば、我々は先づ其處から改革して行かなければならないであらう。其の改革に對して男子と女子の間に眞の同情と理解と共同の精神の起る事が全人類の幸福、全社會の利益であることは今更云ふ迄もないことである。

賣娼の防止と其救濟策

これ迄、何代も〳〵の間婦人は道德上法律上苦しめられてゐた。此の事實を今や婦人は自覺しなければならぬ。社會の災害は大抵冷酷な取扱ひから生れる。冷酷なる刑罰は決して救濟にはならないことを我々は今悟らなければならない。立法が社會の害悪を少しも減じないと云つては少し過言であるかも知れない。併し、賣娼問題は其の原因が複雜で多様であ
る。故に、これを禁止しやうとする立法は無用と云ふよりは、むしろ、悪結果を現してゐる。何となれば其の法律は不幸な女を益々不幸に陥れたからである。人

間を向上せしむるために知識を得やうとする要求は將來最も有效なる運動である。或る適當な時期に於て小供に身體上の生理的知識を與へ、或は成熟したる男女に性に關する知識を得せしめると云ふことは自己の肉體を保護し尊敬せしむる所以である。純潔といふ觀念は不明瞭なる理想としては今日と雖も少年と青年の間に可成數へられてゐるが、たゞ、それを一層正確な權威のあるものとしなくてはならない。亂慾の結果が恐しい慘忍酷迫な形となつて社會に現れた時、如何に無學な人間でも節制の觀念に就て一考しないわけには行かないであろう。最早、女子が男子の慾望に盲從して其の犧牲とならねばならぬと云ふやうなことは斷じて敎へてはならない。少年の時から男子は、女子の名譽、功勞、及び獨立と云ふことが男子自身にも光榮であると云ふ觀念を養成されねばならない。婦人の成功や獨立に對して猜疑心をもつてゐると云ふことは、既に少年少女の時代から遊戯の上などにも現れてゐることは驚くべき事である。

處女が己れの價値を知らず、自ら其の心身を尊敬するの念もなく、從つて、高尙なる目的に自己を献ぐることも知らなかつたならば、僅少の價で自分の肉體を賣るのも無理はない。誤まつた女らしい女と云ふ信仰は婦人が自分を金で賣るといふことと大なる關係がある。柔順纎弱の性質が何よりも好いこととされてゐ

た。これ迄いづれの國の法律でも習慣でも、兎角女のかゝる纖弱な性情を奬勵した傾きがある。それ故、男子が女子を同等と見なかつたのは當然である。

婦人が自分を賣ることが出來ると云ふ事實は婦人の勞働賃金を低下させる結果となる。婦人が其の收入を增加させるために卑しむべき行爲をすると云ふことは安い賃銀と比例して益々其の度が激しくなるものだと云ふ事實を我々は忘れてはならない。かくの如き狀態は非常な惡傾向を帶びて居る事であつて、その狀態から脫しようとするならば先づ勞銀を高めるより外に道はない。賣娼は直接な方法で防壓しようとしても到底其の効がないからである。男子は有產者であること、そして、又、男子は常に女を要求して居ると云ふ事實は、どうしても賣娼絕滅の障害となるけれども、少なくとも婦人をして獨立自營の生活を爲し得る手段を講じてさへあれば賣笑婦の數の減ずることは事實である。

下婢が虛榮の結果、美服を纒ふ事を望み、嬌媚を呈して異性を牽引したり、又、骨の折れる單調な仕事を嫌ふと云ふことも賣娼の重大なる原因の一ッであると云ふことは明らかな事實である。彼女等の弱點や失態が男に利用されて遂に墮落の淵に陷ると云ふことはありふれた事實である。そして、それは法律も社會も彼女等を奴隸扱ひにしてゐると云ふことが最大な原因となつてゐる。それ故、彼女等

を一個の人間として取扱ふことは其の救濟の第一根本である。

世間には一家の主婦であつて感情主義の亂用をやつてゐるものが隨分多い。自分の家に雇ふた僕婢の間に萬一戀愛關係が出來れば直ぐに解雇してしまう。外の事には相當に賢明でも下婢の戀愛に關しては酷に過ぎる傾きがある。けれども、男の僕の私行上の不始末に對しては大抵の場合默許してゐる。そして、僕婢の間の關係は嚴重に監督する。多くの主婦が自分の家に使ふ下婢に快樂を禁ずることによつて下婢の品行を方正に保ふとする努力は反つて其の方向を誤まらしむることになる。一體、家の娘であれ、下婢であれ、戀人を持ちたいと云ふことは自然の要求である。であるのに家の娘ならば好む青年と應接室で公然と逢はれるのに反して、下婢が好む相手と逢ふとする時にはひそかに人目のつかぬ暗闇で逢はねばならぬ。從つて誤りが起り易い。そして、何事かあつた時には主婦は吃驚して呆れ返つて了ふ。けれども、それは主婦が人性を解しない自分の無知を暴露した事である。

淋しい自分の生活に慰籍者を得やうとして遂に地下に轉び込むことは痛ましいことである。故郷を遠く離れて來た下婢の其の淋しい心持ちは、悪桂庵のいろいろな誘惑の手段よりも一層危險なものである。忠告の言葉を如何に多く聞かされても其れは何の役にも立つものではな

い。で、それを救ふには下婢をも温い家の一人として慰籍を與ふるか或は自由な樂みを得させることである。

　所謂惡い女は、所謂惡い男より一層害が多いと云ひ、一反失敗した男子も多少の望みはあるけれども、淪落の女には到底望みがないと云ふことを我々は度々聞かされる。が、これは社會が女に對する冷酷な取扱ひの心理の一現象である。嚴罰によつて如何に多くの女が一層惡徳化して行くかと云ふことは明らかに計量することは出來ないけれども、社會は淪落な女を正道に立返へらしむることは出來ないと考へてゐて、しかも男の淪落に對しては意にもとめてゐないやうな風である。二人で罪を犯して、そして、一人は逃げて殘つた一人が二重の罪を負はねばならぬのである。

　女が自分の位置を確に得た時、男に誘惑された馬鹿娘も社會から非人扱ひをされない時、或は一生涯、日蔭者の淋しい生活を強いられない時、賣娼婦の數は餘程減ずるであらう。今日この種の救濟事業に干與してゐる婦人は献身的精神に富んだ高尙な人々である。けれども不幸にしてそれ等の人々は不規律な生活に漂浪した女の心持を汲取る事を知らない。この救濟は恐らく快樂を求むる事は青年男女の不健全な要求ではないと云ふ事が了解されて、而して、愛ある温い家庭生活が凡ての男女に實現されて始めて功を奏するものであらう。（スワンウイック夫人）

母の日記より

原田琴子

○

もうソロ〳〵夏になると思ふと同時に、私は去年の冬生れた子供がこれから始めての夏を過すのであることを思ひ出した。そして毎年のことながらあの寢苦しい、蒸し暑い夏の夜を、如何したら子供に安眠させられるだらうと考へた。けれど事實は考へることよりも早く迫つて來た、六月になるともう蚤が出て、子供はそれに苦しめられた。夜中に幾度も目を覺しては自分の手でボリ〳〵足をかいたり身悶えしてあばれたりした。朝になつて見ると、丸々と肥つた手足やおなかにむごたらしく赤いぶつ〳〵が出來てゐた。私は可哀想でたまらなくなつた、そして今夜は是非蚤退治をしなければと考へた。でその晩は床の上へ毛布をしいて蚤とり粉を播いてから子供を寢かせた。そして夜中に目を覺しておむつをかへる時に蚤をとることゝした。

　蚤とり粉に醉つた蚤は毛布の糸の中でわけもなくとれた。けれども私はその蚤を潰すのに困つた。私は小さな蟲類がひどく嫌ひで、さわることも出來ない癖があつた。これまで蚤を潰すさいふ

事も自分では出來なかつたのだ。でも今はまさか夜中に人を起して蚤を潰して貰ふわけにも行かなかつた、しばらく氣味惡い思ひを耐へて指先きで蚤をつまんでゐた後に私はそれを小さな紙きれに包んでひねつたまゝ枕もとへすてた、そしてしばらく子供に乳をやつてから後、見るともなくふとその紙きれを見ると、私が半殺しにしておいた蚤はソロ〳〵と紙の外へ這ひ出てゐるところであつた。どんなにいやでも潰さなければならない、この蚤のために子供がまた寢苦しがるのだから――と私は思つた。

子供のために蚤をとるやうになつてから私は夜がことに苦痛になつた。

○

蚤ばかりではなかつた、ある晩のことふと目を覺して見ると子供の耳のすぐ傍の枕の上に、この地方でこがむしといふむかでの形に似た臭い蟲が這つてゐた。私はほんとにびつくりした。そしてあわてゝ枕もとのハンケチで拂つた。が蟲は平氣で少し向ふの疊の上に此方へ向いて這つて居る、そして忽ちまた床の上へ這ひ上らうとする、拂つても〳〵懲りずにまたやつてくる。けれど私にはどうもこの蟲を紙でつまんで棄てる氣になれなかつた、つまんだ時の指の感じを考へるとぞつとした。でもすてゝおくのは尚更氣味が惡いので、丁度その邊にあつた香やり線香の箱をいきなり蟲の

上から、かぶせてその上へ雑誌を二冊ばかり載せてみた。かうしておけば蟲は何處へも出るわけに行かない、朝になつたら誰かに見て貰はう、さう考へて私はまた横になつた。

が朝、掃除にきた女に、箱をあけて見て貰つた時は、蟲は最早居なかつた、如何して逃げたものか影も見えなかつた。

それから後私は夜眠ッてゐて知らない間に蟲の這つてくることを考へると、なかなかねむりにつけなかつた。

○

子供の額は花びらのやうに美しい、眸は晴れた日の海の色のやうにすゞしく、唇は波に磨かれて砂の上に打あげられたうす紅色の貝の形である。

無心な子供の額に眺め入る母の心ほど世にたのしいものはないであらう、けれどもまたその母の心ほど、かずかずの氣づかひに充ちてゐる心もないことであらう。

わが兒よ、お前の前途のためにたゞ一つ私の祈ることは、普通な人になれといふことである、英雄にならなくとも、世にもてはやされる人にならなくとも、たゞつれに自己を省みることを忘れぬ人になれといふことである――と私はお乳をやりながら考へた。

與謝野晶子樣へ

與謝野樣に申上げます。ゆつくり暇を造ることが出來ませんために充分いろ〳〵なものを調べてゐることが出來ませんので殘念で御座いますが、とにかく、先日手に入れました雜誌『太陽』大正五年八月號の『一人の女の手帳』の中の二節目に『男女はもと〳〵父母の生理的事情から其の折々に生じる差別であつて、永劫不變の男性と云ひ女性と云ふ生活素が人間の肉體の中に決定されて存在する譯でないから、男女の性が人の差別を規定する原因であるとは考へられない。』と云ふのが御座います。

そして、この『永劫不變の男性と云ひ女性と云ふ生活素が人間の肉體の中に決定されて存在する譯でない。』と云ふのと『男の細胞も女の細胞も全然同じである。』と云ふのとは同じことではないでせうか？勿論、私もあなたの御文章を見て書いたわけではないのですから、言葉の違ふのを恐れて『……………であると主張して』とは云はずに『……………であると云ふやうなことを主張して』と書いて置いたやうなわけで御座います。私の書きましたものにもつと言葉が似よつた御文章を見ました時には、又、御報告を致そうと存じますが、とにかく、これで。私が全然あなたのお考へを取り違へてゐたのではないと云ふことを御承知願ひたいと存じます。



お咲の夢

お咲は姉を誘つて久しぶりに田舍の父母を訪れた。車に搖られながら通る道は低い雜木山の麓を曲りくねつてゐた。小春日和のうらゝかな日光をあびて睡つてゐるやうな、そして、與へられたものを足りても足りなくても食つて生きて行くと云ふやうな、其の土地の意氣地のない樣子は彼女の子供の時分と少しも變らなかつた。父の家に着いて母のめツきり薄くなつた生際や、父のたつた一本殘つた前齒を見ながら姉妹は里芋の煮ころがしで晝飯を食べた。

「背戸へ出て田を見て來な。今年（ことし）やなか〳〵よく出來て、綺麗にあかるんでるよ。」

頬巾を皺にして嬉しそうに笑ひながら云ふ父の言葉に二人は立ち上がつた。

高く青く晴れた空の下に、此處其處に紅葉を點じた低い山にぐるり取り卷かれた一耕地はサヲサヲと金色の浪を打つてゐた。お咲は田甫に下りて稻の穗を一ツ掌に載せて見た。そして、むつりちと美しく實つた其の米の一粒々々にこもる天然の力を恍惚として心に眺めた。不圖稻の中から飛び出した赤蜻蛉の跡を追ふた彼女の目に耕地の向ふの寺が入つた。それは後に山を負ふて生ひ繁る杉や竹に圍まれてゐた。しんかんとして滅多に人影など見へない筈の其の境内が、ざわついてゐるこ

とや、又は、いろ〳〵の飾り付けらしい色物を見て、彼女は其のお寺にお十夜があることを知つた。そして、姉をすゝめて其の寺へ行つて見ようさした。

『五月蠅(うるさ)いでせう。顔を知つた人がいくらもゐて。』

姉は額に八をよせて云つた。

『でも、どんな氣持ちがするか、十何年かぶりであゝ云ふ處へ行つて見るのも一興よ。』

お咲は姉に強いた。二人は右にも左にも金色の浪を見ながらブラ〳〵歩いた。寺の外廻から煙が眞直ぐに青空に向つて登つてゐた。門口から本堂の階段の下迄、屋臺店がつゞいてゐた。見るとそれ等の屋臺店の持主の顔は皆見覺へがあつた。彼等の方でも珍しいと云ふやうに二人をジロ〳〵眺めてゐた。恐らく彼等は腹の中で

『二本棒たらして、赤ッ毛をふりたてゝ、五厘か一錢の飴やおでんを買つて嬉しがつてゐた娘共が今は金縁の眼鏡なんかですましてる』

などゝ思つてゐるだろうと考へながら、お咲の方では又、十年たつても十五年過ぎても恐らく彼等の命のある限り、彼等は村の貧しい子供等の小使錢をあてにさもしい生活を續けなければならない彼等の運命を憐んだ。處で、彼女はとりわけて親しみもない彼等に今言葉をかけるのも變だし、



知らぬ顔してゐるのも調子が惡いし、と云つて其處から引き返へすのも猶更おかしいし、當惑した心持ちで姉の方を見ると姉は

『そら見たことか。』

と云ふやうな顔をしてゐた。とにかく、あらぬ方に目を向けて通り過ぎようとした時に、並んだ屋臺店から、一寸、ひつこんだ處に、葦簾で後を圍んで、かん酒の釜の下をバタ／＼扇いでゐる色の青黑い稜しい男が目に止まつて、よく見るとそれは彼女の小學校時代の友達で八さんと云ふ彼女の遠縁の者であつた。肉の張りきつた血色のいゝ二十歳前後の八さんを覺へてゐた、お咲は自分と同年輩の人の此の變り果てた姿を見て、丁度人生の秋に立つた痛ましい自分の姿を見せつけられたやうに胸がつぶれた。

立ち止まつて二言三言もの云ひかはしてゐると、汚ない子供等がゾロ／＼彼女のまわりへ集まつて來た。眺め廻して見ると其の中に八さんの俤を寫してゐる小さい顔が五ツ程あつた。

『あら、此の子も、この子も、それからあの子もあなたのお顔ですね。まア、いゝお子持ち。』

『えゝ、食やがつて／＼仕様がねへでさ。』

返事に困つてお咲はいきなり八さんの顔を持つてゐる一人の子供を捕へて



『今日は此のおばさんがお十夜のお小遣を上げませう。』

こう云つて蝦蟇口をあけてゐると其處へ八さんの女房が手桶に水を一杯下げて來た。彼女は髮に少しのふくらみもない、髷の劣つた、赤い玉の根掛のいやに目立つ丸髷を幾度も〳〵下げてお咲に禮を云つた。

その少し前から本堂の中では盛に鐘と太鼓が鳴り出した。同時に、村で聲自慢な人達の歌念佛が聞へた。這入つて見ると村の人達が殆んど本堂を滿してゐた。そして、聲自慢の人達がふりたてゝゐる頭に見惚れてゐた。歌の切れ目々々に彼等が打ち叩く鐘と太鼓の音は本堂の隅々迄も充滿して人の話聲などはすつかり呑んでしまつた。本尊樣の前にうづ高く積み上げられた秋の果物や、飾つてある造花のまわりを小坊主がチヨコ〳〵して、重要な役目をしてゐるやうな顏して、忙しさうに蠟燭の心を切つたりなどしてゐた。悠長な其の氣分の中に自分を浸したお咲の頭は急にのんびりして、日頃彼女を追ひかけ、せめつけてゐた時間と云ふものが全く消へてしまつたやうに彼女は感じた。今日一日野良仕事を休んで、此の單調な音樂に心行く計り樂しんでゐる村人の生活をしみじみ彼女は味つたような氣がした。そして、出來ることなら自分も彼等の日頃の骨折りをいたわつてやりたいやうな氣がして、お咲は見知越の一人の老人の傍へぺたり坐つた。けれども、イラ〳〵し



たやうな姉の表情にひきたてられて、間もなく寺の門の外に出た。變り易い秋の空はいつの間にかかき曇つて冷い風が寺の森や雜木山をがさつかせてゐた。

『おゝ、寒くなつた。』

と不平らしく云ふ姉の顏に

『あなたもよツぽど物ずきよ。あんな汚い子供等にお金をやつたり、あんな穢々しい處へ落ちつきこんだり、つき合つてゐる私こそ、いゝ迷惑だ。』

と云ふ意味をお咲は讀んだ。思ふことをみんな口へ出さない姉の性分を彼女はよく知つてゐたのである。二人はもと來た道を別々なことを考へながら歩いてゐると、突然、後から

『どうも、おまへさんのやうだと思つてましたら、やつぱりおまへさんだつた。よくまア、おいでなさへました。おうちぢや皆さんがどんなに御喜びでせう。何時へ？』

しやがれた老婆の聲にお咲は振り返つた。それは草籠を脊負ふた、澁紙をはつたやうな顏色をした老婆であつたが、この人の顏を見ると同時に彼女の心にはこの人の一人息子であつた虎さんの顏がうつツた。

× × × ×



『其の日稼ぎの天秤棒かつぎのくせにと、あなたは思ふかも知れない。だけど〳〵……』お咲に戀文を送つて見たり、近所の女房(かみ)さんを賴んだり、あらゆる手段をつくしても、何の感じもないやうな彼女に向つて或る日虎さんはそう云つて歎いた。彼女に戀と云ふ言葉をさゝやいたのは此の男が始めてゞあつた。けれども、其の時のお咲には戀と云ふ言葉の意味が分らなかつた。それは、まるで、謎のやうな言葉であつた。

何年か後に彼女がやうやく人情を解すようになつた時に、彼女は始めて虎さんの云つた言葉の意味を悟つた。が、その時には虎さんは、もう、女房を持つてゐて一人か二人の子さへあつた。それにも拘らず、虎さんの眉毛の濃い引きしまつた顏は時々お咲の夢に現れて來た。お咲が父母の膝下を離れて後、世間からは誤解され、しいたげられ、親兄弟からもよく思はれないで、全く離れてゐる時にも、夢の虎さんは彼女を信じ、彼女を勞り、彼女の前に膝づいて忠實な下僕のやうに彼女にかしづいてゐた。それを彼女は一言も人にはもらさないけれども、世にも稀な寶を自分一人が所有してゐるやうな誇らかな氣持ちで胸の奥に秘めて置いた。と同時に、魂はいつも自分の傍へ來て居るもぬけの殼の虎さんを良人と賴んで生きてゐる虎さんの女房を、お咲は氣毒な憐れな女だと思つてゐた。

言葉をかけた老婆の方を振りむいて、しんみり、ものを云ひ始めそうにする妹を又かと云ふやうな顔して姉は眺めてゐた。お咲は老婆に

『皆さんはお丈夫ですか？』

と云つた。口では皆さんだけれども心のうちでは虎さんの様子を聞くのが主であつた。けれども、そう云はれた老婆の顔は急にくもつた。そして、醤油で煮染たやうな色の手拭を頭から取りながら

『丈夫どころか、おまへさん。』

こう云つて老婆は其の手拭で、大涙になつた皺の間に潜つてゐるやうな小さい目をふいた。

『去年の暮に、老爺（おやぢ）は死にますし、そればつかりか、あの虎も！……』

老婆はわツと泣き出した。

『えツ！　虎さんがどうなさいました。』

『虎も死にましたよ！　ろゝ六人の子を置いて。』

腹の底からしぼり出したやうな聲で云つたかと思ふて、後は體をゆすつて泣くのであつた。お咲はドキリと胸を打たれて、目には涙が一杯にじみ出て來た。けれども、彼女の胸を打つたのが虎さんの死で、彼女の涙は良人や一人子息に取り殘された老婆のためであつたことを彼女は意識してゐ



た。夢の中に計り生きてゐた虎さんの肉體が此の世から消へたからとて、それは彼女の涙を誘ふやうな性質のものではないやうであつた。

『虎は三日計りわづらへましたけれども、老爺の方はまことにあつけれへもので御座へました。』

やうやく、涙を納めて老婆は話し出した。

『餅搗きの晩、老爺は搗きたての餅を喉へひツかけて往生したので御座へますが後で聞きましたら、さうぢや御座へませんとよ。』

『後でお聞きになつたとはどなたにですか。』

『巫女に見て貰へましたら老爺が自分で出て來てさう申ましたよ。』

『へえ。』

と云つて、お咲は心のうちで老母の迷信を笑はうとしたが、

『待て〳〵、この人が巫女なるものを通して他界の人と交通してせめてもの慰めにしてゐるのも自分が虎さんの心を信じて一人で嬉しがつてゐるのも同じことではないかしら？』

と、彼女はひそかに考へた。

『老爺が申ますにや、餅を食ふ、ちよツと前から疝氣が起つてゐたさうで御座へますよ。それを

私等はちッとも氣が付かれへでしたがれ、疝氣が起つてゐる處へ、餅が喉へひッかゝつたからたまらなかつたので御座へますとよ。』

『成程ね。』

涙まじりの老婆の話に受け答へはしてゐるもの丶お咲の心は、昔の虎さんの上にさまよつて行つた。其い時々の野菜を天秤棒の撓ふ程、二ツの籠にもり上げて町へ賣りに行くのが虎さんの商賣であつた。なるたけ早く賣り上げて村へ歸つて、そして、商ひに行つた其のまゝの、めくらじまの股引きに同じ仕事着を着た姿で、人通りの少い裏道に、お針の稽古から歸つて來るお咲をいつも虎さんば待つてゐた。言葉をかけらけられてニッコリする彼女を見るのが虎さんは樂しみであつた。手織木綿ではあるが、あらい縞の着物に赤地に白く燕を染めぬいたメリンスの帯がお咲によく似合ふと虎さんは云つたりした。無心にニコ／＼する初々しさが、つらの憎い程可愛いと、近所の女房さんに云つたと、其の女房さんが彼女に云つて聞かせたりした。うちに忙しいことがあつて、お咲が四五日もお針の稽古を休むと虎さんは夜ふける迄、お咲の家のまわりをうろ／＼してゐるようであつた。

或る晩、遲く町から歸つて來たお咲の兄が、もう、寢入つてゐる彼女を、低いけれども力のこも



つた聲でしきりに呼びさました。お吹は何事が起つたのかとびつくりした。兄は嚴格な態度で彼女の枕もとへ坐り込んで、そして、彼女にも坐れと命じた。彼女は怪訝な顔して云はれる通りにしたそれを待つて兄は徐に口を開いた。

「俺が今、門(かど)から這入つて來ると月あかりをよけた、うす暗い處にしやがんでゐる奴があるから此奴どろぼうと思つてひッつかまへて見ると、それや、あの野菜賣りの虎だつたよ。惡い了見で此處にゐたわけぢやないからッて平あやまりにあやまるから、俺も彼奴か物取りするやうな奴でないのを知つてゐるから、はなしてやつたが、彼奴が何のために此の夜ふけにあんな處にゐたとお前は思ふ。下女(をんな)でもゐるなら下女(をんな)をからかいに來たとも思はれるが、今はやどり時で奉公人は皆やどりに行つてゐる事は誰でも知つてゐることだから、さうでないと云ふことは明らかだ。して見るとお前をどうかしようとしてゐるのだ。それでたゞ今俺がお前に云ふ事をようく覺へてゐて呉れ。俺はお前がお父さんやお母さんや、又、俺の目を忍んで何かをするやうな子だとは思はないが、併し、念のために云つて置くのだ。いゝか。先祖代々清くつゞいて來た此の家の血統を汚すやうなことをして呉れるなよ。もし、お前が不義を働いたならお前と云ふ人間を此の家から取り除かなければならないが、併し、それで事がすむと思ふと違ふぞ。先祖代々の名の汚れになるのだ。もし、俺の代

に此の家から不義者を出すようなことがあつちや、俺が先祖に申わけがないことになる。ようく其處の處を覺へてゐて、必ず下らない奴にだまされちやならないぞ。いゝか、分つたか？』
お咲は兄の云ふことが一々尤もだと思つた。
『えゝ、ほんとうにそうです。私、兄さんの云ふことが皆よく分ります。』
と、冴へ〴〵と云つた。兄は非常に滿足して、
『お前は本當に俺の妹だ。』
と云つて、お咲を褒めた。兄に褒められた嬉しさで彼女の心は一杯であつて、虎さんのことなど考へるひまはなかつた。兄が虎さんのことを下らない奴と云つたのは少し變だとは思つたが。併し、いづれにしろ、人目を忍ぶと云ふことは下らないことであり、又、惡いことだとは思つた。そして心に殘る何の煩ひもなく、其の晩はそれで睡つてしまつた。
が、今さなつて考へて見ると、殊に、虎さんが死んだ後に、お咲は虎さんが可哀想でならなかつた。
『ああ、氣の毒な虎さん、どんな思ひをいだいて此の世に別れを告げたらう？私を恨んでゐたかしら。もし、あの時分に私のうちと虎さんのうちが同格の家柄であつたなら、虎さんはあんなに苦



男をしずに、堂々と結婚を申込んで來たゞらうに。自分の身分を卑下して影で計りこそ〳〵苦しんでゐたのだ。或ひは又、私がもう少し年をとつてゐて、男の切ない思ひを解することが出來たなら私はあんなに冷たんではゐられなかつたらう。私は周圍のあらゆる情實を排して虎さんについたかも知れない。もし、そうだつたら、此の老婆は私の姑になるのだつた。そして、一所に苴箍を背負ふたかも知れない。勿論、私はそれを辭すものではない。が、幸か不幸か私が虎さんの心のうちを思ひやるようになつた時には、私の身の上にも幾多の變動があり、虎さんにも子供迄出來た後だつた。あゝ、せめて一度でもしんみり優しい言葉をかけてやりたかつた。慰めてやりたかつた。定めし、淋しい空虚な生涯であつたらう。私は知らず〳〵人一人の生涯をむざ〳〵破壞してしまつた。私が一所になつてやつたなら、虎さんはこんなに早死をするようなことも無かつたらうに。ああ、濟まないことをした。………けれども、濟まないのは虎さんに對して計りでない。先きの短いこの老婆が今此の大きな歎きを見るのも、矢張り、もとは自分がこしらへたことなのだ！』

こう考へてお咲の胸はかきむしられるやうだつた。そして、

『この老婆計りではない。稼人の父親を失つた幼い子供達は……其の子供達を抱へた母親は……』

お咲の目には、又、涙が新らたになつた。老婆はくど〳〵と、お咲の心のうちを知るや、知らず



や、虎さんのわづらいついた時の様子や、十三になる総領の子か町へ野菜を賣りに行つて、生活の足にする事や、嫁が乳飲兒を抱へて途方にくれてゐる事や、いろ〳〵難儀なことを並べてから、

『おまへさんは此の汚ないばゞアの愚痴をしみ〴〵聞いてお呉んなさるから、私や嬉しう御座へます。』

こう云つて、又、醤油で煮染めたやうな手拭を目にあてた。其の手は松の木の皮のやうにあれてゐた。姉は體を行くてに向けて、迷惑そうな寒そうな横顔を二人の方に見せてゐた。

みちすがら、私はどうぞして、老婆の一家に幾分の慰安を與へて、あはせて、虎さんの靈をも慰めたいと思ひあせつた。

『實に、氣の毒だ！』

溜息と一所に思はず口ばしつたお咲の顔を姉は不思議そうに眺めた。そして、

『子に先だたれる親、夫に死別れる妻、親に取り殘される子、そんなことは世間にざらにあること柄だのに、なんで妹はあんな様子をするのだろう。』と、思つてゐるらしかつた。

二人が父の家へ歸つた時にはうす暗いランプがすゝけた十疊間をぼんやり輝してゐた。姉妹のために出してあつた客火鉢にかぶさるやうに兩手をかざしてお咲は坐つた。姉は其の向ふへ、つゝましやかに膝を折つて帶の間から煙草入を出した。そして、云つた。



『あなたはどうしてあのお婆さんと懇意なの？』
『別に懇意ぢやないですが、可哀想な身の上だと思つて、唯、話相手になつてやつたゞけです。』
『それにしては、ちと、しんみりし過ぎてゐましたね。』
『そうかしら。』と云つて、しばらく考へてゐたが、やがてお咲は云ひ出した。
『虎さんは、もう、死んでしまつたから、云ひますがね……實は……其の時分には私が、まだまるツきり子供で分らなかつたんですが、後から考へて見ると、虎さんは本當に私を大騒ぎして居たらしいんですよ。』
『アラ、厭だ。あの男が？あなたにも何にか云ひかけたの？』
お咲は目を圓くして姉の顔を見詰めた。
『私をさん〴〵困らしたんですよ、あの男は。』
『えッ！』
『其の後（あと）で、又、妹のあなたを狙ふなんて隨分圖々しい。本當に恥知らずな奴だつたのね、あの男は。』姉は憤慨した。
其の後虎さんはお咲の夢に現れて來なかつた。

血色（ちいろ）の文字

The Scarlet Letter

ホーソン作

邂逅（二）

知事を取り巻いてゐた優秀な役人達の威風は目立つてゐた。其の役人達は、法律を執行することは神の掟による神聖なものだと感じてゐた時代に屬する人々であつたので。實際、彼等は謹貞な、正しい、そして、潔白な人々であつた。けれども、過失ある女の心をさばき、もつれ合つた網の目から善と惡とを識別し得るために、全人類の中から其處に集まつてゐるそれ等の嚴格な聖人達と同數だけの人物を、選み出すことは難しいことではなかつた。なぜなれば、ヘスターが彼女の顏を其の嚴しい賢人達の方へ向けた時に、彼女は實にまつ靑になつて、そして、震へた。彼女は其の聖人達からよりも、群集のうちにより廣い、より温い同情を豫期し得ることを感じた。

「聞けよ、ヘスター・プリン。」と呼んだのはあの尊い名高いジョン・ウイルソンであつた。此の人

はボストンに於ける最年長の牧師であり、又、同時代に於ける大抵の牧師と同じやうに大學者であり、其の上に温和な親切な人であつた。けれども、彼は彼の智能の發達に深い注意を拂つたやうに其の温和な性質に注意を拂つてゐなかつた。彼にとつては彼自身の其の性質は寧ひであるよりも、むしろ、恥しいことであつたのである。彼は張出し椽の上に立つてゐた。小さな頭布の縁にこましほの髮を見せて。そして、書齋の被ひなしたランプの灯になじんだ灰色の目を、へスターの赤子のやうに、まぼしそうにショボ／＼させてゐた。彼は古い大きな說教書の口繪などにある陰鬱な肖像畫のやうに見へた。そして、それ等の肖像畫と同じやうに、彼にも人間の罪、人間の情、人間の苦惱をさばくために其處から一步踏み出して來る資格はないやうに思へた。

『へスター・プリン。』彼はもう一度云つた。『わたしは此處に居られる若い方と今爭ふたのだ』こう云つて、彼の傍に靑い顏してゐる靑年牧師の肩に手をかけた。『お前は平生此の方の說教を聞かせて頂いてゐたのだから、此の敬虔な若い方が、神樣と、賢明な役人衆の前で、群集が聞いてゐる處で、お前の汚れた暗黑な罪を調べて、そして、處置なさるのが至當であると云ふことをわたしは此の方に納得して頂かうと思ふのだ。此の方はわたしよりも、よく、お前の性質を知つて居られるから、お前の頑固なかたくなな心に打ち勝つにはどんな言葉を用ひればよいか、優しく云ふのがよ

いか、赫すのがよいか、わたしよりも、此の方が適當だと思ふのだ。お前をこの恐しい墮落の淵に陷れた人の名をお前に云はせるために。けれども、此の方は年齢よりは遙かに賢明であられるけれども、靑年の優しすぎる心から、わたしの意見に反對して、この白豊に、この大きな群集の前で婦人の胸の秘密をあばかうとするのは婦人の性質に暴行を行ふものだと云はれるのだ。けれども、實際、わたしが此の方にも云ふ通り、罪を犯すのが恥であつて、罪を告白するのが恥ではないのだ。』

こう云つてから彼は靑年牧師の方を向いて、『もう一度伺ひますが、どう致しませう、デムスデルさん。此の憐れな罪人の處置をあなたがして下さいますか? それとも私がしなければなりませんか?』

この時、張出椽の中の威嚴ある貴い人々の中にさゝやきが始まつた。そして、ベリングハム知事は嚴かな、けれども、尊敬を含んだ和い言葉で靑年牧師に向つて其のさゝやきの意味を表白した。『デムスデル牧師よ。此の女のたましいに關しては其の責任があなたに大いにあるのであるから、此の女に改悛させ、そして、告白せしむるのは、あなたの役目であります。

知事の直截な其の言葉によつて、凡ての人の目は若いデムスデル牧師の上に集まつた。此の牧師は英國の或る大學の出身で、其の時代のあらゆる學問を此の森林地へ輸入して來た人であつた。彼

の雄辯と、そして、宗教上の熱心さは此の職に於て彼が高位に登り得ることを既に證明してゐた。彼は際立つた容貌をしてゐた。顏は白く、高く、高尙で、大きい藍色の目にはいつも憂愁の色をたゝへてゐた。そして、彼の口は彼が殊更に結ぶ時の外は常に震へがちであつたが、それは非常に神經質であることと、大きな自制の力を現してゐるのであつた。そして、彼の生れ付きの氣高さ、學者らしさにも拘らず此の青年牧師のそぶりには或る種の不安、恐怖、又は、嚇されてゐると云ふやうなものがあつた。此の人生の旅に於て、全く道に迷ふた人のやうに。そして、獨り隱遁することによつてのみ、やうやく落ち付くことが出來ると云ふやうに。それ故、彼は自分の職務が許す限り木蔭の多い間道を歩き廻り自分自身を單純に、そして、子供のやうにして置かうとつとめた。そして、必要があつて出て來る時には、多くの人が云ふやうに、新鮮、馥郁、したゝるやうな潔い思想を持つて出て來て、そして、天使の言葉のやうに人々を動かしたのであつた。

ウイルソン牧師と、ベリングハム知事が公衆の聞いてゐる處で、たとへ、汚れてゐるとは云へ、聖い婦人のたましいの秘密を質すやうに命じて、公衆の注意をひいた若い牧師はこう云ふ青年であつた。彼は此の苦しい立場に追ひやられて頰からは血を失い、唇をふるはせてゐた。

× × × ×

編輯を終りて

暑いこと〳〵本當にむされるやうで御座います。窓の外の靑桐の太い幹を蟻は此の暑さに追ひまくられてゐるやうに忙しそうに登つたり、下つたりしてゐます。けれども、此の暑さによつて、農夫達が大骨折りで植へ付けた稻がぐん〳〵伸びて行くかと思ふと、又、何とも云ひ知れぬ愉快さを覺へます。

暑い眞最中に御手許へ行くこの小さい雜誌がいつものやうにかたいもの計りで殆んど全部を滿してゐてはます〳〵皆樣を暑苦しくすると存じましてお笑ひ草に私の習作ですが、『お咲の夢』を入れました。小說になつてゐるがどうか分りませんが、とにかく、御笑讀下さいませ。

これは私が論文を書き始める前に書いたもので御座います。私がこんなものを書き始めた時私の先生(私の夫)が『フヲ〳〵した頭から生れて來る小說は世間にうるさい程澤山あつて却つて厄介だ。お前が小說を書くのは結構だが併し先づ科學的なもので頭を確かにしてそれから後にしてはどうだ。』と云はれまして、私は何でも先生の云ふことをよくきく女ですから、以來科學めいたもの計りを讀んで、途ひに論文計りを書くやうになりました。けれども、いつか、又、或る機會に小說に筆を染めるやうになるであらうと思つてゐます。

●森椿樣。御論文と御手紙を確に頂戴致しました。此の小雜誌を御讀み下さいます計りでなく御親切なる御批評をありがたう存じます。熟讀させて頂きます。此處に取りあへず御厚禮申上げます。

▼編輯用は東京四谷南伊賀町四一山田わかへ▲

本誌定價表

册數		定價	送料
一册	前金	金二十五錢	送料五厘
六册	前金	金壹圓四十錢	送料不要
十二册	前金	金貳圓七十錢	送料不要

○誌代及郵稅は前金の事御送金の際には振替貯金東京四一〇七七番に御拂込みのこと○郵券代用は五厘切手にて一割增○廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年七月二十日印刷
大正九年八月一日發行

東京本鄉湯島天神町一ノ八二
編輯兼發行人 阿部仙太郎

東京神田仲猿樂町十七
印刷人 大杉直次郎

東京本鄉區湯島天神町一ノ八二
發行所 東洋出版社
振替東京四一〇七七番

新案特許第四九二四九號 書類綴込包袋

●本品は各包袋内に總ての重要書類を整理分類して保存收藏するものであります。

●本品は各包袋内に保存しある書類の抽、挿、出、入に至極簡便で少しも紛失混亂の憂なく實に重寶便利なものであります。

●本品を既に使用せられた人々は等しく其效用の著大なるを激賞して居られます。

●今や本品の眞價はあまねく階級の人々に認めらるゝやうになり如何なる家庭も如何なる會社艮了にも是非數部をお備へになる必要があります。

●未だ本品の眞價を知らざる人は此際至急御試用あつて從來雜然として机の引出文庫の中及金庫内にある貴下の書類を整理して下さい。

●本品は一般向のする物である丈けに御中元及年末年始の贈答用として店名商標等を入れ又は意匠などを施してお用ひになるのに實に結構なものだと思ひます、故にそれ等の御注文にも應じます。

●定價

並製一部	大 九十錢	中 七十五錢	小 五十五錢
特製一部	大 一圓五十錢	中 一圓三十錢	小 八十錢

東京神田區西小川町二ノ五
製造元 草野商店
電話番町五二一四番